

明治期における「庭球」の技術について

岡田 明*・表 孟 宏**

序 言

日本の幕藩体制が崩壊し、明治新政府が樹立されるとともに神戸、横浜などの居留地外国人は、彼等がその母国で慣れ親しんできたスポーツを自分達の生活に取り入れて、それをエンジョイするかたわら KRAC¹⁾ や YAAC²⁾ など外国人だけのスポーツ・クラブを組織し、親睦をはかっていた。そのスポーツが時代が経過するにしたがって、次第に日本人に取り入れられて「日本における近代スポーツの発展」となったことは間違いのないことである。もちろん一方では、我が国近代化の為に雇い入れた外国人技師や教師がその目的の為に来日し、そして近代スポーツを伝播したことも事実である。体操伝習所の米人 G・A・リーランド³⁾ や南校教師の英人 F・W・ストレンジ⁴⁾ などがそうである。また洋行してきた日本人がそれを持ち帰ったものもある。

テニスがわが国に伝来したのも例外でなくこのいろいろのルートをたどったわけで類似説も含めると約18説⁵⁾といわれている。またその時期についてはほぼ明治14～16年頃だといわれている。そして明治17年に坪井玄道⁶⁾が体操伝習所でドイツ製のゴム球「青馬」印を用いて生徒にテニスを教えた。これが明治期「ローン・テニス」と呼ばれながら日本の津々浦々まで広がったゴム球の「庭球」の創始であり、現在の「軟式庭球」の誕生である。大正2年慶応が、そして大正9年に他の大学が硬球に転向するまで明治期スポーツの花形として全盛をきわめ、大正期に「軟球」、昭和10年に「庭球」、昭和14年に

* 甲南女子大学助教授

** 甲南女子大学非常勤講師（松蔭女子学院大学教授）

「軟式庭球」とその名称を変えながら最も競技人口の多いスポーツの一つとして現在にいたっている。

このように明治期、「ローン・テニス」または「庭球」と呼ばれながら次第に大流行を果したゴム球のテニスも当初技術的には非常に幼稚であり、戦術などもただ四人が単なるボールの打ち合いをしているのに過ぎなかった。

その後明治期後半になると打球術（打球法）はもちろんのこと、その戦術においても進歩が著しく、変化に富んで非常に多様化はしてくるが、大正2年慶応大学が、そして大正9年他の大学が硬式テニスに転向した一つの動機がゴム球「庭球」の戦術のいきづまりであって、そのマンネリズムにあったのではないかとさえ考えられないこともない。

大正期から現在に至る70余年間、軟式庭球の戦術としての主流は、属にいう「雁行陣」であり、後衛と前衛が分担されており、練習方法なども後衛はグラウンド・ストロークやサーブなどが中心となっており、前衛はボレー、スマッシュなどが中心となって長い年月が経過してきている。

本研究は、明治期におこなわれた変化の多い戦術などが現今あまりにも知られていないという状況のもとで、当時の文献や歴史的資料を調査し、これを紹介することが、現在おこなわれている「雁行陣」に加えてもっと新しい戦術が採用されて、今後の軟式庭球の技術の発展につながり、ひいては正課体育の授業やクラブ活動の指導に生かされることと確信して、ここに研究成果を報告するものである。

1 調 査

(I) グリップ

現在グリップに関しての考え方はラケットの面⁷⁾に対してどう持つかということであり、イースタン・グリップやウエスタン・グリップなどという用語もこのことから生まれてきたわけであるが、これに対して明治期のラケットの握り方の考え方はラケットのハンドルのどの部分⁸⁾を持つかということになっている。つまり、

『第一 ラケットの持ち方』

ラケットの持ち方には、おおよそ三種あり、第一はラケットの柄の中程を握る仕方にして、初心者一般に傾き易き持ち方なるが、この仕方はローンテニス界にては最も忌む所のものなり、何となれば此持ち方によれば、手とラケットの網の中心との距離、短くなるを以て、低き球或は少しく離れたる球を打たんとするときは、勢ひ體を多く屈めざるべからずして、遂には非常に見苦しき姿を造り出すに至るべければなり、其外高き球を受け外すことあるのみならず、受け返したる球も、他の方法にて持てる時に比して球勢弱く、且體の左方に来れる球を打返すことは非常に困難なり、』

とあり、また、

『第二の持ち方はラケットの柄の端を握り、其最も端部の皮のつきたる部分を僅かに掌の外に出し置く方法なり、この持ち方は最も普通に撰ばるる方法にして、姿勢の上にも、球勢の上にも、又遠き球或は高き球を受止むる上にも、適當の持ち方なり、初心者は必ず此方法にて慣るるを勉むべし、充分に此仕方に心得たるものは、更に、

第三の持ち方に移るべし、此持ち方はラケットの柄の最も端部を全く掌中に入れ、これを握れるときは四本の指にて之れを包み、小指は後押の役をつとむる如くする仕方なり、然れども初めより此持ち方になれんとするときは、却って、ラケットの使用、意の如くならずして其持ち方に慣れざる内に、遊戲にあきを来すの恐あれば、初めには第二の方法より入るを順序とす。』

とあり、大変興味のあることは当時その第三の持ち方が非常に流行し、第三の持ち方をしているものが一流の選手といわれている。そしてショート・バウンド（「ショルトバウンド」となっている）などはこの持ち方に限るとあり、また前方に落ちるボールを打つのにこの持ち方が適しているといわれ、当時別名で「手裏劍法」（しゅりけんほう）という打ち方といわれている。

(II) グラウンド・ストローク

現行の指導要領では「グラウンドストローク⁹⁾・ボレー¹⁰⁾・サービス¹¹⁾・スマツ

12) シュ」と細分化されているが、明治期には「ボールを打つ姿勢」として一括して次の様に書かれている。¹³⁾

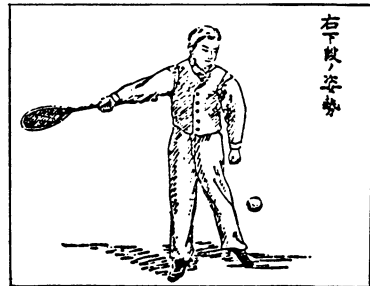
『(一)體の右方に來れるボールを打つときの姿勢

この場合の姿勢に、おおよそ三種あるが如し何れの場合に於ても、體の方向は、ネットと平行せずして、之と四十五度乃至九十度の角度をなし居るを可とす、

(イ)上段の姿勢　ラケットを肩の上に振り上げ、擊剣を使ふとき、同じ姿勢を取ることを云ふ、此場合は反跳したる「ボール」の高さによりて、體の重心の位置を上下に加減せざるべからず、但し此際に兩足の位置に関しては、随意たるべしと雖ども、吾人の經驗によれば、兩足を揃へて、重心を下げんとすれば、自然體を曲ぐるに至るべきを以て、此醜勢を避けんが爲めに、成るべく兩足を開くを可とす、

(ロ)中段の姿勢　右手を、ラケットと共に前方に突き出しラケットの網面は地に垂直ならしめ、且つ「ネット」と少し角度を為さしむ、

(ハ)下段の姿勢　此姿勢は嚴安全にして且最も見へよく、加ふるに最も有力なる「ボール」を送るに適せる姿勢なり、その右手は、充分伸したる儘、體と四十五度の角度をなし、ラケットは、ボールを打つべき面を地に向はしめて、腕と同じ方向に伸さるるが、或は其方向と上方に四十五度の角度を保たしむるなり、府下にて姿勢の美なるを以て称せらるる高等商業学校は多くこの姿勢を採る、



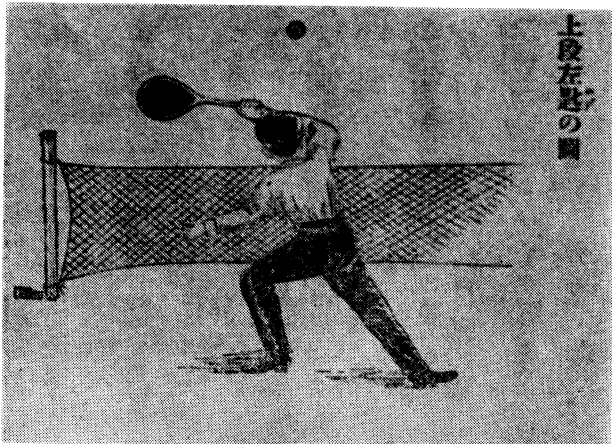
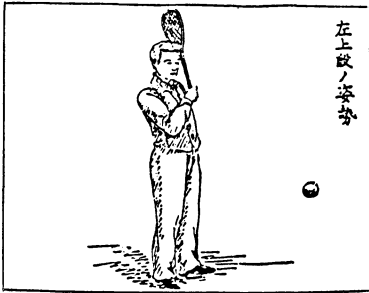
(二)體の左方に来るボールを打つときの姿勢，バック（Back）を打つときの姿勢

此場合の姿勢にも上段，中段，下段の三様あり，

(イ)上段の姿勢 右拳を左の肩の前に持ち来し，ラケットは直立せしめて，ボールを打つべき面を，ネットと反対の方向に向はしむ，ショルト・バウンドを打つに妙なり。

(ロ)中段の姿勢 右の前臂を水平にして，體と密接せしめ，ラケットはボールを打つべき面を，ネットに向はしめて矢張水平に左方に伸はさる。

(ハ)下段の姿勢或は劔客の姿勢 體は之を直立せしむと言ふよりは，劔客の足を揃へて今しも敵に切り込まんとする時と同様の姿勢にあるべし，その





体を来るべき「ボール」に対して、適當の位置に占むるや否や、常に体重を左右に托し置きいざと云ふ場合に、重心と共に左足を一步前に踏み込ましめ、^{いわゆる}所謂、落し腰の姿勢となるべし、而して右手は左の腰部に添へ、ラケットの面は下を向かして腕と同じ其方向に伸ばす、その丁度、劍客が今しも電光石花を演ぜんとして、其鯉口を^{いくちひろ}寛げたる時の秋水のあるべき位置にラケットを保つべし、

此姿勢は最も強きボールを送るに適す。』

とあり、明治期におけるグラウンド・ストロークのフォア・ハンドとバック・ハンドに関して上・中・下段それぞれ六種類の打ち方の説明になっている。

(四) ボレー

またボレーについては次のようで、

『(曰)ヴォレー (或はダイレクト) にて打つときの姿勢

ヴォレーにて打つときの姿勢にも、左右各三段の種類ありと雖ども、最も有効にして、又最も多く行はれ居るは何れの方向に於ても、上段の姿勢なり、右の上段の姿勢は、全く前に説明したる上段の姿勢と同一なり、而して左の上段の姿勢は、前のラケットの正面をネットに背反せしめたるに反して此場合にては、ラケットのボールを打つべき面を、ネットに向はしむるを異なりとするのみ、中段の姿勢も頗る流行せりと雖ども、^{すこよ}下段の姿勢に至ては其困難なると、危険の多きことより、止むを得ざる場合にのみ行はれ居るが如し。』

と他のグラウンド・ストロークの説明などと比較して余り詳細にわたっての説明がなされていない。

Ⅳ) サービス

サービスの説明については詳細にわたっている。

『サーブの打ち方 「サーヴ」とは毎回勝負の始めに於^おいて、コートの一
方の隅より、相手の相對せる隅の方位にある「サーヴィング、コート」にボ
ールを打ち送るを云ふ、此サーヴの強弱、巧拙は、全体の勝負に大なる関係
を有するを以て、最も注意して練習するを可とす、吾人の經驗する所によれ
ば、ラケットを右手にて持ち上げ、其握れる部分を右耳の上方にて頭部に殆
んど接觸せしむると同時に、ボールを左の手にて、右肩の前一尺五寸位の邊^{へん}
にて、鉛直に上方に投げ出し、それが下り来りて頭の上、五寸位の高さに至
れるを劇しく打つくるにあり、何れの場合に於ても、ボールは必ずラケット
の面を正しく、ネットに向はしめずして、多少ラケットを捻ぶる心持にて打
つを可とす、勿論此場合の打ち方に種々ありて、僅かの手心によりて色々の
ボールを送るを得べし、予の經驗する所によれば、下り来るボールの上面の
方を強く打つくるときは、ボールは殆んど一直線をなして進み、バウンドの
やり方も高し、然れども若し、下り来るボールの内面（相手のコートに面す
る部分を外面と云ふに対して用ふ）打つくと同時に我体の重心をも下すと
きは、ボールは「ネット」を越すや否や急に下向して、其バウンドも甚だ低^{はなは}



きを以て、これは最も恐しき強球と称せらる、尚又、下り来るボールの上面に「ラケット」の中心をあてると同時に、其中心をして、ボールの右面を下りて下面を半周する如くに強く打つときは、相手のコートに落ちて、殆んど跳ね上らざる恐しき魔球となるべし、若し此時ラケットの中心を、下り来るボールの右面の下方に當て、これをその下面の方向に廻転するときは、球勢弱けれども、相手のコートに落つるや、今迄で進み来れる方向に反跳せずして、上方に僅か飛び上るか、若しくは却って後方に返る所の（Cutting Ball）となるべし、是等の打ち方は、注意したる「サーヴ」を行ふによりて、容易に自得せらるるに至るべし。

「サーヴァ」は相手のコートの何れの邊を狙ふべきかは、熟練の程度と相手の位置によりて、臨機應變の處置に出づべしといえども、最も安全なる狙ひ所はネットの中央の所と相手のサーヴィング、コートの際の方向との間を狙ふにあり。

「サーヴ」は一般に強く打送るを便とすといえども、時ありて弱きボールが却って成功することなきにあらざらず、その相手があまり用心過ぎて、「サーヴ」線を去る遠き所に位置を占むる場合には、非常に弱く辛ふじて相手のコート内に落つるようなる「ボール」を送るべし、多くは相手を失敗せしむるを得べし、よし萬が一受け返さることあるにしても、かかるボールは一般に弱きを以て今後は充分に狙ひを定め、乱れかかりたる敵陣の虚を見て、最も烈しきボールを送るを得べきを以て大概は之れにて相手を破るを得べし。』

と大変くわしい説明がなされている。その他一般的に「カッティングボール（Cutting Ball）」にかなりの重点をおいていることがうかがわれ、ツイストのカッティングボールも「魔球」と呼ばれている。

(V) 戦術（戦法）

(I)から(IV)までについてはすべて明治期における打球に関する説明であり、現在の指導方法とはかなりの相違点がみうけられるが、それにもまして(V)の戦術に関しては現在では全く考えられない様な種々の戦術やらその名称など

がみうけられる。

(1), ^{カクヨウ}鶴翼陣法と^{ギョリン}魚鱗陣法

明治期における戦術については種々な戦法がいろいろな用語を用いて説明されている。その中でも鶴翼陣法と魚鱗陣法などという古い兵法の用語が用いられ優雅である。

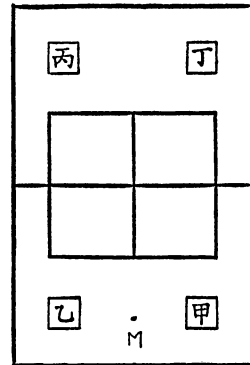
鶴翼陣法とは、『蓋し此場合に於て中央線の右に落つる球は右方競技者、其左に落つる球は背部競技者に一任するを可とす。此鶴翼陣法は容易且つ適当なる配備にして最も普通一般の例なり。併しここに他の異なる陣法を張る人あり。即ちサーブ線の前方に落下する球は一人にて総て受合ひ、他の一人は寧ろネットより遠く距りて落つる球のみ打ち返す。若し競技者の一人が「パウレイ」を得意とする時は寧ろ此魚鱗陣法に依るを良策とする。』

とあり、前者が現在でいえば並行陣で後者が雁行陣といえよう。

(2), 正進的位置

これは現在でいう並行陣型であり、当時並行陣型にも後段並行陣、中段並行陣、前段並行陣というように二人のポジションによってそれぞれの名称が付けられている。

『正進的位置 これは兵隊の正面進行の場合に於けるが如く兩々相並んで、ネットに面するより名づけたるものなり、予の経験する所によれば、これは総ての場合に於て、最も安全なる、又最も



有効なる位置の占め方なり、此位置をとれば自己の領分の内、何處に落つるボールにても、決して、受け返すに間に合はぬことなく、優然と狙ひを定めて、これに應ずることを得べし、但此場合に注意すべきは、両者の中間例へばM點に落ちたる球に對して、甲と乙の兩人一度にこれに向ひ、為めにラケットを衝突せしめて、敵に漁夫の利を占めしむることあり、或は此際辛ふじて一人のラケットによって、受け返したりとするも、既に己に隊形を亂し、敵をして、充分に付け入るべき、空地を与へたるものなれば、第二回目には

大概、敗北の不幸に陥るべし、故に斯る場合には必ず、組の一人に任せざるべからず、此注意はローンテニス勝負中の最も大切なる注意の一なり、されば、吾れより此位置を占めたる敵に、ボールを打ち込まんとするには直ちに此場所を狙ふか、或は一旦隅を狙ひて、相手の一人を一方に偏よらしめ、二度目に此中間目がけて打ち込むべし、多くは面白き勝點を得べし、然れども此隊形は相互にとりて、最も安全なるものなれば、初めには、最も正則なる、最も強きボールを送るを主眼とし、幾回も續く間に相手の隊体乱れたるを見て、始めて思ひ切たるボールを打ち送るべし、始めより、敵の隙のみ注意して、勝たん勝たんとし居るときは、却って敵に寄せらるるの期を造るものなり、此心掛けは晴れの勝負に於て特に大切なるを覚ゆればコートに上るものは、造次も忘るべからざる格言と知るべし。』

¹⁵⁾
とある。

①後段並行陣（底部並行陣型）

明治34、35年ごろまで4人ともベースラインにいて打ち合うグラウンド・ストロークだけのテニスにすぎなかった。これを「底部平行陣型」といいもっとも普通の陣型であった。当初は非常に幼稚であり、単なるボールの打ち合いに過ぎなかった。そのためにワンポイントの打球数が百球を越すことも珍しく無いということであった。明治38年に東京高商を卒業した安藤博氏が昭和14年に次の文を寄せている。¹⁶⁾

「庭球は平素の練習にも又試合にも常にダブルスのみで、シングルスは全くやらぬ。又前衛と後衛との分業はまだ全く無かった。四人が大体ベースライン近く位置して互に打ち合ったものだ。そして相手方が少々大きな球を打った時に之を打ち返さずにアウトさして得点する事は、何だか少々卑怯な様な気が残っていた（我々以前には、手が届く球はアウトと知りつつも打ち返してやった時代が有ったと聞いている、庭球技の上にも日本では謙信式の武士気分が漂った事は面白いじゃ無いか）。一つの球が百回以上も打ち返される事も有った。明治34～36年は一橋庭球部が最も優勢を誇った時代であった。高木、片柳、金原三君は当時傑出して居た。なかんずく高木さんは六尺有余

の巨軀で端艇部のリーダーであり、悠然且豪壮な型で有った。片柳さんは五尺二、三寸位、軽快俊敏、正確で技も亦鮮かだ。金原さんは麻布中学の擊劍と野球の名手（捕手）で、球を見る事すこぶる速い、これに加えるに俊敏機を見てネットに近く突進し左右に出没して敵陣を圧迫、止めを刺すに妙あり。此時代に於ける只一人の前衛の技を巧にした。けだし日本で自然に生んだ前衛の元祖であった。僕等は此三人を庭球の神さんのごとく思った。又球を切る事の妙技を持った向井・和田組が有った。当時野球カーブ研究が余り知られぬ時代とて、向井・和田組には相手も魔球と称して嫌がったものだ、殊に両人の球は各反対にソレるので一層翻弄^{はんろう}された。』

とある。

②中段並行陣（中部並行陣型）

中段並行陣というのは二人共サービス・ライン位まで前進してプレーすることをいい、新しいテニスへの示唆をするものがすでに当時開発されていたことは注目に価いすることである。

『明治39年には、丙十生の名で「つぎの時代は並行陣に変化すべきなり」とその研究を促し、つぎのような文で「運動の友」に記述している¹⁷⁾。

「今春早稲田が慶応と戦った時、早稲田の鈴木・岩田組が此陣形を用ひた事があった。其勝負は兎に角いくらか目新しいものとして、時事子は之れを庭球界の新紀元にあらざるかと迄云ふたが、其時若し鈴木組が成功して居たら、一層の注意を引いて、一步進んで研究する者も出来たかも知れない。が不幸其時は失敗に終わった為めあまり顧みるものも無かった。然るに今秋になって慶応と高師が戦った時、慶応の岡が江森と組んで、前衛の岡が後衛となって、此に並行陣を張ったと聞き及んだ。余は残念ながら其ゲームを見る事が出来なかつたが、兎も角此の勝負も失敗に帰したらしい。斬うなると或は並行陣の存在を疑ふ人があるかも知れないが、是れだけで並行陣なるものを否定する事は出来ない。ある欠点の為に失敗に帰したとて、其全体を全然否定するのはあまりに早計と云ふべきである。

並行陣は若しロッピングに対する適當なる防禦法を発見した暁には恐るべ

き陣形となるであろう。然し之等は実地について次第にそれぞれの順序を経て発達し、変化して行くべき筈のものであって、決して座上の空論では行かぬ事が明かであるから、余は斯道の選手に其研究を希ふものである。斯くして一方並行陣を張るに於ては對手も亦自然防禦法として同じ陣形を取らねば不利益であるから、此に並行陣は普通の陣形となって来る。と、斯うまで予想せらるるが、果して当れりや否や。』

と中段並行陣を高く評価している。¹⁸⁾

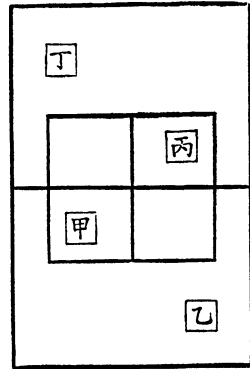
(3) 雁行的位置

魚鱗陣法というのがそれであり、あたかも魚の「ウロコ」の様に二人が相前後して相手に対する陣法をいう。また「かり」が飛んでいるのによく似ていることから「雁行」と名付けられている。

③大雁行陣

④中雁行陣

⑤小雁行陣



『此位置を占むるには、一組の内例へば甲は、

ヴォレーの打ち方に長ずるか、或は相手より来る高きボールを巧みに、敵の居らざる方向に軽く打ち遣るに妙なるか、或は割合に背高きが故に、自己の領内目がけて進み来るボールは悉く之を喰止むるに都合よきかの場合に用ゆべき方法なり、かつこれと同時に、其組の一人なる乙は右より来るボールを打つに特意ならざるべからず、何となれば、かかる隊列をなすときは、相手は主として、乙を狙ふを以て、ボールは自然と、乙の右方に来ること多ければなり、尚巧者なる相手によりては、我が隊列を乱さんが為め、甲の後に高きボールを打ち送るべきを以て、乙は、此際最も敏捷に之に赴むき、其球を受け返すと同時に、甲をして己れの先のコートに走らしむるか、或は自ら氣早く、帰らざるべからず、要は各瞬間に於て一つの領分に只一人居るように注意すべし、然れども相手の左程に場所慣れざるものありては、前方にある甲の奏効、誠に見事なるものあり、畢竟するに組となる人の技倆と、相手

の手腕によりて、此隊形の取捨を定むべきものなり。』

とあり、また同じ雁行陣でも大雁行陣、中雁行陣、小雁行陣と二人のポジションの違いによってそれぞれ呼称をかえている。現在行なわれている術戦は大雁行陣型ということができる。そしてこの雁行陣型を始めて用いたのは明治36年頃慶応が練習応用しかけたといわれている。²⁰⁾

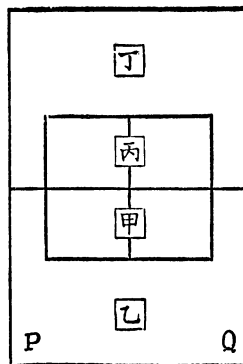
(4)、側進的位置

前後衛が縦に一列になり相手の打球時に左右にパッと別れる戦術である。

⑥単行陣

『側進的位置 兵隊の側面進行の時の如く、甲乙互に相重なり居るより、此名を附せるなり、此位置は、雁行的位置の一層極端なるものにして、一組の内例へば、甲がヴォレーの打ち方に長ぜるも、他の打ち方には、あまり得手ならざる場合に作るべき隊列なり、然れども、かかる隊列にあるときは、甲の左右に夥しき空地あるを以て、巧みなる敵は、必ず甲の右か或は其左を狙ふべし、然るときは、甲の背後にありてボールの何れの方向に来るかを凝視せる乙は、最も輕快に之に駆け付けざるべからず、今丙より送れるボールはPに来るものとすべし、而して乙は走り行きて、容易に之を受け返したるものとすべし、然れども巧猾なる敵は、ヴォレーにて、乙の右のQの所を狙ふて打ち付くべければ、此場合に、甲はPよりQまで駆け付けざるべからざるを以て、敵球の強き場合には、到底、間に合ふものにあらずして、おおよそは負けとなるべし、故に一般に云へば、此位置の占め方は頗る不安全のものとせざるべからず。』

とあり、昭和初期における日向正善のいう単行陣という戦法である。²¹⁾



2 結果および考察

明治期における「庭球」(現在の軟式庭球)の技術についての調査につい

ては以上の通りである。そしてこの調査研究は主として高橋清一の「実験ローンテニス術」を中心としたが、明治期の他の文献に記載されているものも含めて全般的に調査検討を加えると、

- 1, ラケットの持ち方についてはラケットの柄のどの部分を持つかということが問題にされており、現在のように「グリップ」がラケットの面に対してどのようなものであるかというとはかなりの相異がみられる。つまり現在いわれている「イースタン・グリップ」とか「ウエスタン・グリップ」とかを云々するようなことは記されてなく、「上手な人はラケットの柄の先を掌中にする」などラケットのハンドル（柄）の持つ部分について述べられている。
- 2, 「上手な人はラケットの柄の先を掌中にする」という持ち方でかつ短かく飛んでくるボールに対しての打ち方を「手裏剣法」（しゅりけんほう）といっている。
- 3, サービスの種類の内、特に「カッティングボール」の研究が進んでおり当時このサービスを「魔球」といっている。
（明治35年高商の和田が「魔球の元祖」といわれている。）
- 4, グラウンド・ストロークにおける「ツイスト」（ネット近くに打つ短い打球）も当時「魔球」といっている。この際のボールは普通の飛び方でなく、やや「ファー」と浮きぎみに飛んで相手のコートに入る球をいう。
- 5, 戦術（戦法）としては次の様に分かれている。

(1), 正進的位置（鶴翼陣法）

- ①後段並行陣（底部並行陣型）
- ②中段並行陣（中部並行陣型）

(2), 雁行的位置（魚鱗陣法）

- ③大雁行陣
- ④中雁行陣
- ⑤小雁行陣

(3), 側進的位置

⑥単行陣

以上大きくわけて6陣型に分けることができる。しかしながらこの戦法も初期の段階においては4人が後方からただ単にボールを返すのみで、いわば後段並行陣であったものがチャンスを見て1人がネット近くへ前進しスマッシュをしたりしたことから中・小雁行陣に発展したと考えられる。

(明治32年に金原がモーションに巧みであり、スマッシュに長じていたので「前衛の元祖」といわれている。)

また、たまたまチャンスを見てネット近くへ前進した中・小雁行陣から発展したものが大雁行陣であり、大雁行陣になってはじめて前衛が定着したと考えられる。

(明治36年早稲田の飯田が左右のモーションに巧みで「ボレーの元祖」といわれている。)

並行陣については後段並行陣から中段並行陣に発展したのではなくむしろ中雁行陣または小雁行陣から中段並行陣に発展したものと考えられる。単行陣については前記の五戦術に加えてやや奇襲的に採用された戦術と考えられる。

6, ボールのスピードが速くなってきた。

(明治37年に早大鈴木・岩田組が強球をもって奇勝を博し、「鉄抱組の元祖」といわれている。)

7, 強打とロビングとを併用して大正・昭和と続いている現在の戦術の基礎となるものが出現した。

(明治39年早大の氏家・山住組はロビングと強打とを併用した見事な戦術を確立した。)

8, 当時の用語

明治期に使われたテニス用語としては初期における「テニス」とか「サルブ」とかというものを除けば余り変っていないが、現在のテニスからみて珍らしいと思うものをあげてみると、

①「²¹⁾テニス」……「テニス」の意

- ② 「サルブ」²²⁾ …… 「サービス」の意
- ③ 「ショルトバウンド」²³⁾ …… 「ショートバウンド」の意
- ④ 「サルヴィスライン」²⁴⁾ …… 「サービス・ライン」の意
- ⑤ 「ハーフカウルト」²⁵⁾ …… 「ハーフ・コート」の意
- ⑥ 「ストリックター, アウト」²⁶⁾ …… 「レシーブサイド」の意
- ⑦ 「ストリックター, イン」²⁷⁾ …… 「サービスサイド」の意
- ⑧ 「ファウルト」²⁸⁾ …… 「フォールト」の意
- ⑨ 「イゝヴン」²⁹⁾ …… 「デュース」の意
- ⑩ 「利益」³⁰⁾ …… 「アドバンテージ」の意
- ⑪ 「球手」³¹⁾ …… 「サーバー」の意
- ⑫ 「受手」³²⁾ …… 「レシーバー」の意
- ⑬ 「打出人」³³⁾ …… 「サーバー」の意
- ⑭ 「打返人」³⁴⁾ …… 「レシーバー」の意
- ⑮ 「一様」³⁵⁾ …… 「デュース」の意
- ⑯ 「対立」³⁶⁾ …… 「デュース」の意
- ⑰ 「ツライビング」³⁷⁾ …… 非常に打ち返しにくい「ロビング」の意
- ⑱ 「スコンクロビング」³⁸⁾ …… 走っていても間にあわず返球することの出来ない「ロビング」の意
- ⑲ 「アラ又」³⁹⁾ (あらまた) …… 相手側によってポイントをされかかったボールを自分のパートナーが「拾い返す」, 現在でいう「フォロー」の意であり, この用語の語源はどうやら「高田の馬場で助太刀に加わった有名な“荒木又衛門”」からとってあるようである。
- ⑳ 「ドンデンス」⁴⁰⁾ …… 「ローン・ロニス」の意 (「ローン・テニス」という発音を耳で聞いて間違えていたようである。)

註

- 1) Kobe Regatta and Athletic Ceub
2) Yokohama Amateur Athletic Club

- 3) George Leland アメリカ人 (1852年～1929年) 在日明治11年9月6日～明治14年7月3日。
- 4) Frederich Wiliam Strange イギリス人 (1854年～1889年) 在日明治8年～明治22年7月5日歿。
- 5) 表孟宏他「日本における近代スポーツの発展に関する一考察——テニスの日本への伝来について——」松蔭女子学院大学「研究紀要」第24号 (昭和57年12月)。
- 6) 坪井玄道 (つばいげんどう) (1852年～1922年) 嘉永5年1月9日～大正11年11月2日歿。
- 7) 日本軟式庭球連盟編『軟式庭球指導要領』(昭和53年12月), 2頁。
- 8) 高橋清一『実験ローンテニス術』(明治33年3月30日金昌堂) 45頁～48頁。
- 9) 日本軟式庭球連盟編, 前掲書3頁。
- 10) 日本軟式庭球連盟編, 前掲書14頁。
- 11) 日本軟式庭球連盟編, 前掲書11頁。
- 12) 日本軟式庭球連盟, 前掲書16頁。
- 13) 高橋清一, 前掲書48頁。
- 14) 佐竹郭公『中学世界』一庭球一 (明治35年3月10日東京博文館) 112頁～124頁。
- 15) 高橋清一, 前掲書68頁～70頁。
- 16) 一橋大学テニス部編『一橋のテニス』(昭和57年5月20日) 32頁～33頁
- 17) 丙十生『運動の友』一庭球の並行陣型一 (明治39年12月)。
- 18) 藤善尚憲『テニスの技術史』(昭和47年6月1日大修館) 565頁～566頁。
- 19) 高橋清一, 前掲書65頁～66頁。
- 20) 一橋大学テニス部編, 前掲書35頁。
- 21) 高橋清一, 前掲書66頁～68頁。
- 22) 23) 24) 坪井玄道『戸外遊戯法』(明治18年4月金港堂)。
- 25) 26) 27) 28) 29) 30) 下村泰大『西洋戸外遊戯法』(明治18年3月博聞社)。
- 31) 32) 野口圭園『内外遊戯全書第六編一庭球一』(明治32年12月博文館)。
- 33) 34) 35) 36) 高橋忠次郎『新式女子遊戯法』(明治37年7月文盛堂)。
- 37) 38) 39) 雑誌『ローンテニス』(大正15年1月ローンテニス社)。
- 40) 吉井良尚『わが心の自叙伝』(昭和48年6月10日神戸新聞)。